知らなかった ユダヤ民族の歴史あれこれ⑤

パウロ　乾　寿夫

ユダヤ教徒は共同体の指導原理をめぐって生じた階級的思想的対立の中から諸党派が結成された。「蔦の教会」第397号で述べたサドカイ派、ファリサイ（パリサイ）派の他に、聖書には記されていないが、一世紀の歴史家で「ユダヤ古代誌」著者フラウィウス・ヨセフスやユダヤ人哲学者アレクサンドリアのフィロンがその存在を書き記しているエッセネ派がいた。

エッセネ派とクムラン宗団

ヘレニズム・ローマ時代を通じて苛酷な外国支配を受けたユダヤ民族には、どんなに大きな犠牲を払っても、支配勢力に対する闘争をやめようとしない抵抗精神がみなぎっていた。彼等の信念によれば、これは単なる民族解放闘争ではなく、世界の支配者である唯一の神の選民が、異教徒の邪悪な支配を打破するために戦う正義の戦いであった。しかし現実は彼らの希求する方向とは全く逆方向に動いていった。神の全能にたいする信仰が、絶対的であればあるほど、敗北は不可解であり挫折感は深かった。この厳しい現実に直面して、彼らはあえて歴史の支配者である神の計画を問いたださずにはいられなかった。神に対するこの問いかけから生み出されたのが、黙示思想であった。

この黙示思想を生み出した当時の時代的雰囲気の中から、多種多様の過激派が生まれた。エッセネ派はこのような宗教的過激派の一派であった。今から70年前の1947年に、死海北岸のクムランの洞窟で、死海写本が発見されるまで実態が不明であった。約10年間行われた発掘調査の結果、エッセネ派が死海西岸に本部を置く契約共同体であったことが明らかになった。発見された多数の

クムラン遺跡

文書の中にエッセネ派という名称は全く見当たらないことから、このセクトは「クムラン宗団」と呼ばれている。

クムラン宗団の創立者は、紀元前2世紀なかばにハスモン家のヨナタンがエルサレム神殿の大祭司に任命されたことに反対して、祭司グループ間の大きな亀裂争いに敗れ、荒野に追放された「義の教師」であったということを、宗団の文書が暗示している。エッセネ派の一般メンバーは町々に住んでいたが、中心メンバーはクムランの本部に集まって、完全な共有財産制度と独身主義を守る契約共同体を形成していた。このセクトは律法を厳格に守り、絶えず礼拝をささげて、終末が早く到来するよう祈る生活に没頭することであった。死海写本の一つ「戦いの書」において終末戦争の状況を詳細に描いているが、エッセネ派は元来平和主義者であり、熱心党が指導した対ローマ武装反乱は、本来彼らが目指していたことではなかった。それにも拘わらず、AD66年に始まった大反乱（第一次ユダヤ戦争）に彼らは参加して戦い、その結果クムランの本部は破壊され、エッセネ派は消滅した。

死海文書から解ったクムラン・エッセネ派とキリスト教との違い

クムラン洞窟で発見された死海写本の巻物は考古学者たちによる解読分析が進められ、その一部が公表されるとメディアがセンセーショナルに報道を始めた。そして激しい論争が起こり、一部の評論家はイエスとその弟子たちはエッセネ派であったと主張し、他の立場の者はイエスの宣教時代にクムランの住民も存在していたが、死海写本のどれもイエスに言及しておらず、新約聖書に描かれているイエスのいかなる弟子にも触れていないとして、イエスとその弟子グループはクムラン・エッセネ派とは無関係だったと主張している。

解読分析が進み、クムラン・エッセネ派とイエスとその弟子グループの多くの類似点と基本的な相違点が明らかになってきた。

（類似点）

(1)入会者は2年間の修行の後、水による洗礼の儀式を受けた。

(2)写本の宗規要覧で「荒れ野でヤーウェの道を備えよ」と教えている。

(3)神からの聖霊の存在を信じていた。そして聖霊は今や共同体の中に住んでいるとした。

(4)クムラン・エッセネ派の成会員として完全に加入した場合、自分の財産をすべて共同体に提供し、共有財産にする制度だった。

(5)不品行以外での離婚を禁止していた。

(6)会員たち自らを「光の子ら」という用語を用いていた。

（相違点）

(1)決定的違いは、穢れた者として目の不自由な人、手足の不自由な人、ハンセン氏病の人、耳の聞こえない人、売春婦、取税人は共同体に加入出来ないし、聖所にも入ってはならないと拒絶している。これとはまったく逆に、イエスとその弟子たちは積極的にこれらの人々のところに出掛けて行き、病を癒し、手を取って一緒に涙を流し、取税人と一緒に食卓についたりした。

(2)エッセネ派のダマスコ文書には「だれも安息日に家畜の出産を助けてはならない。また、もし水ためまたは穴に落ちても安息日にそれを上げてやってはならない」とあり、律法を厳格に求めた。イエスはこれを批判して「安息日は人間のために造られたのであって、人の子は安息日の主なのである」（マタイ12：8）と強調した。

(3)分離主義のクムラン・エッセネ派は写本の宗規要覧で「神の選びたもうたものを皆愛し、神の斥けたもうたものを皆憎む。すべて闇の子（共同体以外の者）をおのおの神の報復に入るべきその罪に応じて憎むこと」と規定している。イエスは「しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」と述べている。

このようなことから、イエスとその弟子グループはエッセネ派を熟知していたと思われる。弟子たちの中にはファリサイ（パリサイ）派から加わった者もいたことは聖書の記述にもあり、エッセネ派の者もイエスに従った者がいたであろうことは、容易に想像される。のちに原始キリスト教となるイエスとその弟子グループにはエッセネ派の影響がかなりあったと私は思っている。（完）

［参考文献］ 古代イスラエル史（マルティン・メッガー著　山我哲雄訳　新地書房）、ユダヤ教史（石田友雄著　山川出版社世界宗教史叢書4）、イスラエル史（M・ノート著　樋口進訳　日本基督教団出版局）、ユダヤ教の歴史（市川裕著　山川出版社）、地図・絵画・写真（ウィキペディア日本語版）「イエスと死海文書」ジェームス・H・チャールズウァース編著、山岡健訳（三交社）